

築田寺だより

Ryoudenji
Letter

2026.04
春号

いあいさつ

文 齋藤絃良 (築田寺住職)

もう春ですね。
この季節には、数年おきにふくろ
うが子育てのために築田寺の山に住
み着きます。

十年前の春先のある日、とぼりが
降りて間も無くの刻、築田寺の駐車
場にて私は足を止めました。南の森
から微かに「ホッホウ」という鳴き
声が聞こえたのでした。ふくろうだ！
と私は嬉しくなり、しばらくその場
に佇んでじっとその声を聞いていま
した。そのうちに思わず応答したく
なり「ほうほう」と私も鳴いてみます。
しばらく沈黙が続いた後、「…ホッ」
と一声が返ってきました。私はさら
に嬉しくなり、数任復か「ほうほう」
と「ホッホウ」の応答が続いたので
した。通じ合えないと勝手に思って
いた存在とのやりとりが生まれると
思わず嬉しくなりますね。もしかす
るとふくろう側もそのように感じて
いたのかもしれませんが、いや、相手
側はどうかわかりませんが、お互い

に何らかの影響を受け合い交感して
いたことは事実です。ふくろうとの
交流を喜びの原点として、この森を
ずっと残したいという想いが私の中
に想起されていきました。

さて、森を残すという想いは立派
ですが、それを実践することはとて
も難しいことです。森を放っておけ
ば当然藪化し荒れた状態（人間から
見れば）になりますし、手付かずの
野生林は倒木や外来種の支配も強く
なることがあります。築田寺の山は
民家と隣接しており昔から里山とし
て人と共生していたので六十年代ご
ろまでは綺麗に整備された山でした
が、高度経済成長
の時代にエネル
ギーが移行して以
来、手入れは行き
届かなくなりやが
て下草と老木の山
となりました。も
ちろん定期的な手



入れをすれば良いのですが、では一
体誰が手入れし続けるのかというこ
とになります。さらには、お寺は墓
地は非課税ですが山林には税金がか
かるため、そのままにしておくだけ
で毎年数百万円が課される。だから
日本の都市部のお寺は、山を手放し
墓地にするケースが多いのですね。
寺院としては、正直に申し上げると
山を墓地にする方がよっぽど運営が
楽です。ではやはり山を墓地にすべ
きでしょうか。現実には難しいです
山を墓地にすれば「しばらく」の寺
院経営は安定するものの今見ている
景観は永久に失われます。一方でそ
のままの山林にしておけばもしかす
るとお寺自体が潰れてしまうかもし
れない。こういう時には仏教の教え
に寄ってみましょう。

仏教は、物事を固定的な実態とし
てとらえず多元的で流動現象として
認知していく哲学なのでいくつかの
視点で考えてみます。例えば山林を
墓地にするとしたら数十年は霊園事
業として栄えるかもしれませんが、
築田寺の爽やかな風や豊かな植物や
水が失われ、結果的に魅力が失われ
ていくことになるかもしれません。
そうすると百年後くらいには廃れた
場所になる未来も見えます。山を残
し住職が手入れを行う未来はどうで
しょうか。今やお寺も跡継ぎ不在問
題が増える時代。住職の体調によっ
て山の手入れの進み具合が変わると
すると、跡継ぎがテンポ良く切り替
わらなければ、それもまた廃れた場
所になる未来が見えます。まだまだ
答えがみつからない問題ではありま
すが、ひとまず現在は、お寺の山や
景観をなるべく残すため、住職や寺
族だけではなく様々な人が築田寺を
大切に思い守っていくという「布施」
の行によって保たれるお寺を目指し
ています。そのために、様々な方々
との出会いが育まれる場を頑張って
作っています。精進食堂、宿坊 禅体験
マルシェ、お祭り、年中行事の再興
など、築田寺の新しい門を開いて「築
田寺に思いやりをもつ人」を増やし
ているところです。昨年は一ヶ月間
宿坊「泰全」を貸し切ってノルウェー
からミュージシャンたちが音楽制作
のためにやってきました。彼らは異
国の文化圏であってもいつも築田寺
への敬意を払い大切に扱い、お寺に
とって特別な出会いとなりました。

築田寺を大切にしている人たちによっ
て末長く手入れが行き届けば、数百
年後の未来にもふくろうが子育てに
帰ってくる東向山が残っているかも
しれませんね。

絵 波田野うと (8歳)

EVENT

春の催し



2026.04.08 (水)

花まつり

お釈迦様の誕生日をお祝いする花まつり。花で飾った「花御堂」に安置された「誕生仏」に「甘茶」をかけてお祝います。



2026.04.18 (土)

2026.06.20 (土)

開門日和

上半期の開門日和の日程です。様々な禅体験（予約制）、出店、音楽、茶席、映画の上映など楽しんでいただけます。



詳細はこちら(PDF)

春彼岸

今年のお彼岸は、三月二十一日が春分の日(中日)です。ので、前後、三日間の三月十八日(彼岸入り)から三月二十四日(彼岸明け)までの七日間になります。

お彼岸は、煩惱や迷いの世界である「此岸(しがん)」から悟りの世界の「彼岸(煩惱や迷いのない自由な心の世界)」へ渡ることを目指す仏道修行の期間です。お彼岸を単なる墓参りの時期としてではなく、私たちが日々の生活の中で心を磨き、豊かな心を育むために自身の生き方を見つめ直す機会でもあります。日々の生活の中で、生かされていることへの感謝の気持ちや、他者への敬意を忘れないこと。「時は命なり」とし、与えられ

深掘り！ 仏教行事



た時間を大切に使い、無駄にしないこと。物質的な豊かさだけでなく、心の豊かさも忘れないこと。これらの言葉は、知っているだけでは意味がありません。実践して初めて、心が実っていくものです。

春彼岸は、自然が目覚め、新しい生命が芽吹く時期です。私たち自身の心にも仏の教えという「善き種」をまき、育ててまいります。

花まつり

四月八日はお釈迦様がお生まれになった日です。この日は、降誕会、灌仏会(かんぶつえ)と呼ばれますが、お寺では親しみを込めて「花まつり」と呼んでいます。

「花まつり」という名前の由来は、お釈迦様が約二五〇〇年前にインドのルンビニ(現在はネパール)で誕生した際、周囲に美しい花が咲き誇っていたことによります。

天からは祝福の甘い露(甘露)が降り注いだと伝えられています。この情景を再現し

たのが、色とりどりの草花で飾られた小さなお堂の「花御堂(はなみどう)」です。花御堂には、生まれたばかりのお釈迦様の像「誕生仏」が安置されています。甘露の故事にちなんで甘茶をかけて、お祝いしましょう。

また誕生直後に七歩歩いて、右手を天に、左手を地に指さして「天上天下唯我独尊(てんじょうてんげゆいがどくそん)」と言ったとの伝承があります。

勿論、これは後世の人が作った話ですが、これには、次のような背景があります。二五〇〇年前のインドでは、身分制度(カースト)があり、家柄や血筋による貴賤を絶対視していました。これに対し、お釈迦様は、人の差別のもとになっっているカースト制度を真っ向から否定しました。

「この世に生きるすべての存在は、誰に代わられることもない、それ自体で尊いものである」という、差別を排し、生命の尊厳を説いた言葉です。

文 鎌谷祖禅(養田寺僧侶)



築田寺のお仲間紹介

no.

02 | 花綵 hanazuna

フワースタylist

野沢ちかさん



「花綵」という名前の由来

日本列島のように島々が弓なりに配列している列島のことを花綵列島（かさいれつとう）と呼ばれています。花を編んで作った綱＝花綵（はなづな）のような弧状をしている列島の意で、ドイツのペッシェルが称したものだそうです。

植物を通して季節を感じ、日本の五季（春・梅雨・夏・秋・冬）とつながっていたい。植物を通して人と人がつながっていく場をつくりたい。

そんな想いから花綵 hanazuna という屋号に決めました。

活動

花を買うというより、「花と一緒にいる」日々の心地よさを感じてもらえるような花生けの教室やリースのワークショップ、オーダーブークやアレンジメントの他に、お店や保育園の生け込み、ウエディングやライブの会場装花などを行っています。築田寺で行われる法要のお花や墓前花もおつくりしています。眠られている方と同じ土に育つ築田寺の

草花。築田寺の草花を摘み、眠られる方と遺された方との想いをつなげられたらと思っています。

築田寺のかかわり

はじめは、保育士をしていた時に任職である紘良さんが声をかけてくれたことでした。今では一緒にイベントを運営したり、この先五〇〇年つづくお祭りを考えたり、お庭や山の手入れをしたり、草花や果物などの四季の恵みを一緒に喜んだり、様々な形で関わらせていただいております。

花綵の一押し

築田寺の里山に生きる力強い草花や、有機露地栽培の花農家さんに育てられたたおやかな草花の美しさや愛おしさをお伝えしています。

「ただ花をいける」だけで、心がふっとほぐれることがある。そんな時間をすこしずつ丁寧に届けたい。そして、花との暮らしを楽しみたい人たちと、ゆるやかにつながりたいと思っています。これからも、どうぞよろしくお願いたします。



築田寺のかたわらにある白い建物「tem」にて開業。

築田寺の里山に生きるたおやかな草花を摘み、花生けのお教室やリース作りのワークショップなど、草花を身近に感じられる暮らしの提案をしています。

◎営業日 | 月金土 12:00 ごろ～17:00 ごろ

※臨時 closed あり。スケジュールをご確認ください。



Instagram
@hanazuna_style

第①回

500年先への手紙

築田寺は歴史を受け継ぎ、その文化を500年先に手渡していく試みを続けています。500年後、この土地に生きる人たちに140文字(X)～500文字(Threads)で手紙を書いていただきます。

今回は築田寺のお仲間紹介でもご登場いただいた「花綵 hanazuna」のフラワースタイリスト 野沢ちかさんにお願しました。

…500年は永いですね。今から500年前、誰も今の暮らしを想像できていなかったように思います。今から500年後はどんな暮らしをしているのでしょうか。ヒトは地球にいるのでしょうか。進化して別のモノになっていたりして…

私たちヒトは、目先のことを追いかけてずっと走りつづけてきました。効率よく！もっと豊かに！と、たくさんの文明を手に入れてきた代わりに、たくさんの消費をしてきました。速く移動できる乗り物や、楽に家事をしてくれる機械など、たくさんの豊かさを生み出しました。でも、ふと立ち止まってみると、生み出された時間に次々と予定を入れてしまい、結局ずっと追いかけているような気持ちに…

建造物やアート作品など、たくさんの美しいモノを創造してきました。でも、里山の植物や空を眺めていると、つい「これに敵うものはないなあ～」と感動…

「豊かさ」って一体何なのでしょうね。私は、よく分からなくなってしまった2026年現在のひとりのヒトです。ただ、分からないなりに、たくさんのものを地球からいただいている私たちヒトが、今よりもっと地球と仲よく愉しく暮らしていたらいいなと思います。

『あなたは何を想って生きていますか?』と、500年後のヒトに会えたなら、聞いてみたいものですね。



●築田寺百景●

雪の築田寺

積る程の雪に降られることはこのところ二、三年に一度でしょうか。そのたびに、雪の重さで折れてしまった木の枝や竹の片付けに追われて大変ではあるのですが、やっぱり白く染まったお寺や庭の風景はとても綺麗で、儚く贅沢な時間だなあと思います。



一月十日(土) 毎年恒例のどんと焼きが行われ、今回も沢山の人が集まりました。住職、檀家総代牧野さんからの一言の後、点火。毎回ヒヤヒヤするほどの高い炎が舞い、竹がはじける大きな音が響き、一月の夜を照らしました。炎が落ち着いてからは皆、枝に挿した紅白の団子・ミカン・ウインナーやイカ(笑)等を焼き食べます。野菜のスープやお酒のふるまひもあり、いつものワイワイとした雰囲気。新年の築田寺の夜は更けていくのでした。

Report

どんと焼き

二〇二六年一月十日(土)



Homepage
<https://ryoudenji.net/>



Instagram
@ ryoudenji



Facebook
築田寺 (りょうでんじ)